

今月の谷口雅春先生のお言葉

立派な本を味わいながら読みましょう

本を可愛^{かわい}がって読めば力がつく

勉強室は、好きな本をたくさんならべておいて、気がむいたとき、自然に、自分でよろこんで読むことにする方が、力がつくのであります。いやいや人から「読め」といわれて、気がすすまぬのに読んだのでは、心の窓がしまっていて、本に書いてあることが充分頭へはいらぬのであります。本を可愛^{かわい}がって、その本をひらくことが、楽しい気持ちになって、「わたしの可愛い本よ」といって可愛^{かわい}がってから本を読めば、本に書いてあること

が、一層よく心の中へはいって来るのであります。

食物もよくかみしめて、消化して吸収しなければ力になりません。本を読んでも、よくかみしめて、それをしみじみ味わって読まねばあまり力にならないのです。よいかみしめて読む方法は、五、六行よんでから、その本をとじ、眼^{まなこ}をとじて、その意味を心の中で思^{おも}浮かべて深く味わって見ることです。私などは少年のころこうしますと、眼^{まなこ}をつぶると眼^めの前に、その本のページの形と同じ形が眼^{まなこ}にうかんで来て、その通りのことがおぼえられたものです。これは一種の記憶法にもなるのであります。本を読みながら、時々、眼^{まなこ}をつぶってそれを考えて、

一々首を少し動かし「うなずく」ようにすると、よくおぼえられるものです。（新装新版『真理』第3巻167～168頁）

立派な人の伝記をお読みなさい

本に書いてあることは、ただ、お料理の材料みたいなものです。その材料をどのように組合わせておいしいお料理にし、それを、自分の心の滋養物にするかどうかは、本を読む人自身にあるのであります。材料のよいところは捨ててしまつて、くずのところばかりを集めて料理にしておいしいことはありません。本を読んでも、くずのところばかりを「面白い、面白い」といつて読んで、ためになるところを捨ててしまつては、読まぬほうがましな位です。

面白いばかりを目的に書いた本よりも、昔から立派な人になったり、世の中のために尽した人々の伝記をお読みになることは、たいへんためになります。文章はコト

バの力で書いてある事と同じように、読む人をならせる力をもっているものです。つまらぬ本を読んでいますと、つまらぬ人になりますし、聖人の伝記を読んでいますと、聖人になりますし、英雄の伝記を読んでいますと英雄になるものです。（新装新版『真理』第3巻171頁）

善い本は同じ本でもたびたび読みなさい

数をたくさん読むよりも、すこしの立派な本をよく味わいながら読むことは、その人の精神を立派なものにします。むやみに大食するよりも、適当な養分を適量にいただくほうが健康によいようなものであります。よい書物は一遍や二遍読んだだけで捨ててしまわないで、十回でも二十回でも、繰返し読むことです。本の表紙は大切にしてお包みでもして、一遍読み終るごとに取りかえて、新しい気持ちを出すのがよろしい。

本の中味は、読んで感心したところに赤い線を一度引

いておき、その次にまた感心したところには青い線を引いておくなど、たいへんよろしい。本にすじを引くのを遠慮することはいりません。読んだときの感想などを本の余白に書いて置くことは、あとでたいへん参考になり、大人になってからも、自分の少年少女時代にこんなところを、こう考えながら読んだのだな——と思出すのも楽しいものです。

本の中に、こうして書きこみを作るのはよろしいが、読みかたにフリガナを鉛筆でつけておくなどはよくありません。漢字をいつまでもおぼえないで、仮名ばかりをあてにして読むようになると、文字を憶える力がなくなります。

(新装新版『真理』第3巻171～172頁)

元気になる本を読みなさい

悲しいことの書いてある本や小説を読んではなりません。悲しいことを書いてある本を読みますと、心の中に

悲しいことを思いますから、心が悲しくなり、自分の心の悲しさと同じ波長の悲しいことがあつまってきて、身体も弱くなります。立派な人の立志伝、困難をたえしのんで研究をなしたげた事績を書いた本、勇敢なことの書いてある本、勇気の出る本、元気になる本、男らしい冒険のことを書いてある本、人に深切をする喜びの書いてある本などを読むと、読んだ通りに、勇気のある、元気な、健康な、深切な人になります。

(新装新版『真理』第3巻173頁)

